

2006年度『館長懇話会』

日時 : 2006年6月16日(金) 11:00~12:00
場所 : 広島修道大学7号館7101教室(模擬法廷)
出席 : 41校 館長41名(会長校 龍谷大学含む) 陪席24名

開会のことば : 当番校 広島修道大学図書館 館長 森川 潤
開会の挨拶 : 部会長校 久留米大学図書館 館長 西土 純一

久留米大学図書館西土純一図書館長を進行役に、「館長懇話会アンケート項目・回答」にもとづき説明、進行が行われた。

1) 「館長懇話会」趣旨説明

館長懇話会は4回目になる。テーマは「図書館職員の配置について」。図書館職員の配置問題あるいは要員問題はどこの大学の図書館でも今話題になっており、あるいは検討課題になっていると思われる。忌憚のない意見交換をしていただいて、参考にさせていただきたい。

2) 討議事項

(進行)

事前にアンケートをお願いした。アンケート結果についてご感想を伺いたい。かなりの大学が土曜日・日曜日も開館をし、開館時間も延長されている。このため各大学とも人の配置が問題になっている。今の状況では正職員を非正規職員におきかえることが主流。その逆は考えられない。そのあたりの各大学の状況をお話いただきたい。

A大学の例では、医学図書館で今年度から正職員を2名減らして派遣職員を3名入れた。外国語(英語)の問題があった。英語の能力を持っている派遣職員を3名入れた。その結果人件費は今までの2名の正職員の範囲内で納まった。人手が増えて専門的な能力を持った人が入ってきたのでサービスが向上した。全体としては非常によかったという結果になった。

それぞれの図書館で、こういうことをしたという実例をご紹介いただきたい。

(B大学)

A大学の例で、減らした正職員の育成はどうなっているのだろうか。

(進行)

司書資格が要るかどうかは、そのときの責任者の考えによる。今の責任者は、司書資格はなくてよいという考えである。

(C大学)

数年前から毎年確実に正職員を減らしてきている。逆に派遣職員が増えている。正職員の年齢が高いのは組織集団としては不健全。図書館としては危機的な状況であると認識している。学生、教員へのサービスとして、大学図書館は何を求められているのか考えている。各大学のお話を伺いたい。

(進行)

派遣職員の増加に危機感を持っている、ということです。現状について伺って、専門性を求めて専任職員の育成をどうするかというような議論にしたい。

(D大学)

派遣職員は司書資格を持っている人を雇っている。正職員と派遣職員のバランスをどのようにとっていくかで、色々と交渉している。

(進行)

派遣職員も資格を持っていることが評価できる、ということです。

(E大学)

アルバイト・派遣職員で正職員と半々である。最近問題になっているのはアルバイト・派遣職員がルーチン化された業務に偏りがちで、正職員に時間的にも労力的にも負担がかかってきている。アルバイト・派遣職員と正職員の間で業務をめぐるコミュニケーションが問題となっている。非正規職員はこれ以上増やしたくない。

(進行)

正職員の業務に負担がかかっている。人間関係の面が難しいなどのマイナス面の発言をいただいた。

(F大学)

非正規職員に働いていただいてよいところは、利用者に近い立場におられること。図書館のあり方を議論するときに、利用者に近い立場で意味ある提案や意見が出てくる。正職員とは違った観点で意見を言うていただける。正職員の維持には努めている。年配の方がレファレンスで生きがいを感じて学生を指導している。大学に所属していると言う意識が強い。事務局が人事と予算を握っているので図書館は受身になるが、図書館の取り組みや新しい可能性を事務局に訴えている。また学生を集めて図書館の運営に関して意見を聞いている。

(進行)

積極的に図書館のあり方を模索しておられる。正職員は良くても現状維持です。正職員だけの図書館があれば紹介していただきたい。

(G大学)

正職員3名だけで運営している。大学に司書課程があるので卒業生がそのまま正職員になっている。去年から業務が滞っていたので、理事長にお願いして正職員を2名から3名にしていた。本学では開館時間も短く、土日開館などの地域開放をしていない。

(進行)

派遣・非正規職員を入れた場合の功罪について検討したい。大学側からすると人件費の抑制と

専門的な知識を持った人を図書館に入れるという2つの問題がある。図書館に入ってくる正職員の育成の問題がある。

(H大学)

先日、正職員の配置換の内部調整会議があった。そのとき人事を担当している大学の執行部から驚くような話を聞かされた。図書館の職員は専門職だから短期間に配置換してもらっては困るといったら、20年も図書館に職員として勤務しても、大学としては評価の対象にならないという発言があった。大学としては正職員にはいろいろな部署の仕事をすべて身につけて欲しいので、3年から5年の間隔で異動を行う。司書資格を持っていようといまいと関係ない。4月に異動があったが、7月にさらに10名の正職員のうち4人が配置換えになった。このうち2名はコンピュータ関係でかなり重要な仕事をしていて、そのうち1名は若い職員で、他大学の大学院・社会人の夜間コースでコンピュータの勉強していた。その職員の配置換えに反対したら、業務の中で自分の研究をするのはまかりならんといわれた。図書館職員の専門性がまったく考慮されていない。このようなことが起こったときに、大学にどのように物申せばよいのか、お知恵をお借りしたい。

(進行)

今は切実なお悩みです。積極的に専門職員として遇する、研修や講習会に参加させるという意見もある反面、司書資格は考慮しないという意見も最近でてきた。A大学は医学部がある。病院で医事業務に精通していた職員が図書館にくる、図書館の職員が医事課に配属されるという人事が行われる。正職員はジェネラリストであるべきだ、いろいろな職場を経験して、将来の管理職に育って欲しいという考えがある。図書館は専門性が要求される。大学としてはジェネラリストが欲しい、将来に発展させたい。図書館はスペシャリストを欲しがっている。このあたりをどのように考えていくのか。

(I大学)

今のような内容の事は直接には起こっていない。どこにも持っていきようがないから図書館というような人事は断っている。ほかで使い物にならない職員は図書館でもいらない。そのような人事は突っぱねている。固くお断りしている。

(進行)

かなり恵まれた環境ですね。

(J大学)

小さな学校なので特殊かもしれない。図書館のことを良く知る事務長は、図書館の人事の問題も予算の問題も配慮してくれる。うちの特徴は図書館しかないと話をするとう試広報課長は、写真を増やしたり中身を書いてくれた。使い物にならない職員は図書館ではとらないといわないで、もしかしたら図書館でおおばけに化けるかもしれない。ほかにいって図書館を応援してくれるかもしれない。そのことに希望を持たないとやっていけない。

(K大学)

図書館の課長が教学部長に抜擢された。年齢給で図書館の課長では給料に見合った仕事をしていないということで教学部長に抜擢された。司書の資格をとった職員は教学に配置換えになった。

この際に人件費を少し落として派遣職員を採用した。経費削減のターゲットは職員である。専門職制度を作っていきたい。専門職制度でよい正職員をとって、派遣職員とアルバイトでワークシェアリングして、積極的に問題を解決していきたい。

(進行)

専門職制度を大学に作ってもらう、これは1つの改善点であり方向性であろう。

(L大学)

数年まえからアウトソーシングを実施し外部に委託した。臨時職員の削減を行ってきた。正職員も減らされるのではないかという危惧もあった。正職員と委託職員の間でギクシャクしたが、業務連絡会で意見交換し誤解を解く努力をしてきた。当初はいろいろと問題はあったが現在はおちついている。

(進行)

図書館職員の育成は悩ましい問題、それぞれの大学の人事政策がある。一方で専門性を持った人材が外部にいる。どのように図書館職員を育成していくか。積極的に専門性を磨こうという図書館もあれば、司書資格は要らない、誰でもできるという考え方もある。コンピュータさえ出来ればいいという考え方もある。

(M大学)

よいアイデアというのはほとんどない。というのは各大学で全部人事方針が違う。図書館の正職員と派遣職員との間で、各大学の図書館の実情があまりにも違う。司書で図書館に長くいる人と、事務部門からたまたま回ってくる正職員を単純に比較して、外部に専門家がいるから派遣でという話になるが、同じに論ずることは出来ない。正職員の質があまりにも違う。ポイントを整理しないと議論にならない。大学の人事を司っているのは、事務系の行政職の職員である。大学全体を回ってきて、ジェネラリスとして、自分が発展してきたから、図書館の職員もそうあるべきだと考えてしまう。図書館に関しての知識がないのに、図書館の人事をおこなっている。これを変えようと思ったら人生がいくつあっても足りない。先生方にやっていただきたいことは、先生方に図書館を使わなくては成り立たないような授業をどんどんやっていただいて、図書館に負荷をかけるとそのときに判断がつくかもしれない。

(進行)

大学によっていろいろ事情が違うが、図書館としてこれができるいなければならないのだというように、図書館の職員として要求レベルを高めていく視点が必要という意見です。

(N大学)

ご承知のように図書館の運営をほとんど外部委託している。1990年代の成長で教職員数が大幅に増加していった。それに職員の採用が間に合わなくなった。専門分野について委託するという方針が出てきた。各大学で事情が違うのはまさにそのとおりで、委託を入れたのはそういう過程の中から出てきた。専門知識のある人を外部から呼ばざるをえなくなったという実情があった。

(進行)

各大学で事情が違うというのが結論。それぞれの大学にあった一番よい運営の仕方、人の配置

を考えていかななくてはいけない。結論としては、それぞれの図書館長が中心になってご自分の大学でやれる範囲で、大学をきちんと説得して自分たちの図書館をよい方向に持っていくしかない。